

「消化器癌の診断と内科治療— 1. 食道・胃・大腸」

北里大学名誉教授 岡部 治弥 監修
北里大学教授・内科 西元寺克禮
前横須賀共済病院内科部長 谷口 猛 編集
北里大学客員教授 柴田 久雄
北里大学助教授・内科 勝又 伴栄

JR 仙台病院消化器内視鏡センター長
仙台市医療センター名誉院長

望 月 福 治

本書は対象を消化器癌に絞り込み、食道、胃、小腸および大腸の診断と内科的治療について系統的な記述がなされている。癌の診断に重点が置かれていることはもちろんであるが、特に治療の項では内視鏡の治療と癌の化学療法が一括して記述されており、このような企画はおそらく本書が初めてではなかろうか。

内容は大きく6章に分けられている。すなわち、診断篇では食道癌、胃癌、小腸癌、大腸癌、消化管悪性リンパ腫、それに前述した消化管癌の内科的治療から構成されている。更に、それぞれの章は早期癌、進行癌、深達度、浸潤範囲、生検、病理などの項目別に診断法が詳述されている。随所に症例が提示され、内視鏡、X線、超音波像、切除標本などによって具体的に診断のポイントが的確、かつ平易に解説されている。例えばIIc型早期胃癌の内視鏡診断は“病変部の周辺、病変部境界、陥凹内面に分けてみるとわかりやすい”と述べられ理解しやすいし、同様に、内視鏡による深達度診断は“病変の形態、組織型、大きさなどから

深達度を類推する方法と、粘膜下層以深への浸潤した変化をもとに深達度を推定する方法”があるなど、要点を押さえながら病変の特徴と目のつけどころが簡潔でわかりやすく記述されている。

また、消化管癌の内科的治療の章では前半は内視鏡の治療、後半は主として癌の化学療法が記述されている。内視鏡的粘膜切除(EMR)については、切除の実際、内視鏡の治療の成績、内視鏡的切除後の経過観察などが記述されている。更にEMRの適応を決めるために病巣の拡がり、深達度の判定は精密さが必要になったことが折に触れ強調され、豊富な症例と長年の研究業績をもとにした著者らの見解が示されている。また、内視鏡的摘除術の適応については、胃癌では20mm以下の隆起型、10mm以下でUI(一)の陥凹型で、かつ深達度mの高分化型癌であるとしているが、食道癌では深達度がm1、m2まで、大腸癌ではsm1までと、消化管全体が系統的に扱われているので、臓器別に対象を異にすることが示され興味深い。化学療

法の項では、食道・胃・大腸癌それぞれに悪性リンパ腫など各疾患別に化学療法の対象と目標、各薬剤の特性と作用機序、投与方法、効果判定と治療成績、副作用対策などが症例とともに具体的に記述されており、多数の図表により化学療法の現状と将来への展望が紹介されている。巻末には抗癌剤の一覧表も付記されており、著者らのこの部門での意気込みが感じられる。

本書を通読すると、消化器癌の診断と治療の基本を学べるとともに、そこで積み重ねられた知識を更に整理しながら身につくように記述されている。全編を通じて食道、胃、大腸へのアプローチの方法が具体的に解説されており、消化器病を始めて間もない人、特に消化器専門医を目指す若き研修医に広く推奨したい。

● B5 頁292 図46 写真135
カラー写真362 色図17 表108
1998 定価(本体23,000円+税)
〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)